

褻のあわい——その火口^{ほくち}④

天理大学人間学部教授
 松田 健三郎 Kensaburo Matsuda

「褻のあわい」の立ち現れ(火口)として、「同じ」を論及するにあたり、イエンゼン、A. が採集し、その主人公の名にちなんで名付けたハイヌウェレ型神話が、当面の話題になっている。前稿にも確認したが、まずは食物起源神話であり、同様の起源神話に通底して、女性(神)のきわめて不可解な死とその状況・形態をモチーフとする。吉田敦彦による紹介を、本稿に必要とされる限りで概略してみよう。

バナナの熟した実から生まれた、最初の間人たちの一人にアメタ(黒い、暗い、夜などの意)という男がいた。狩りの途中、イノシシを追って池の底から牙に刺さった、世界で最初のココ椰子の実を手に入れ、夢告にしたがって地中に埋めた。3日、また3日、さらに3日たつと大樹となり花が咲き、やがて五躰揃った少女となった。アメタはこの少女を「ココ椰子の実の枝」という意味でハイヌウェレと名づけた。なんとそれから3日後にはもう妙齢の乙女となったハイヌウェレは普通の人間ではなく、大便として陶器の皿、銅鐶といった宝物を数知れず排泄した。

9つの家族が、らせん状の九重の輪をつくり、9夜つづけるマロという踊りでも、夜毎に珊瑚、磁器の皿、刀、銅器などの宝物を皆に配った。人びとはその富に魅了されつつも、嫉妬と気味悪さに激しく駆られ、マロ踊りの9日目の晩に深い穴を掘り、ハイヌウェレをそこに投げ込み土をかけ、その上で踊りすつかり踏み固めてしまった。

戻らぬ娘を心配したアメタは、ハイヌウェレの生まれたココ椰子の樹から9本の葉脈をとり、マロ踊りの九重のらせん状の輪にそって1本ずつ差し込んだ。9本目の葉脈の先に付着した髪の毛と血から娘の死をさとしたアメタは死体を掘り起こして多くの断片に切り刻み、その一つひとつをマロ踊りの広場の各所におのおの別々に埋めた。すると、その断片はそれぞれまだ世界に存在しなかったものに変った。肺臓、乳房、恥部、尻、耳、足、太股、頭などからそれぞれその部位に色や形や臭いの似た種類のヤム芋が発生したのだ。この時以来、人間はこれらの芋を栽培し、それを主食として暮らしていけるようになった。

吉田はさらなる食物起源神話を紹介する。自身の言及にはないが、イエンゼンの採集した、うえにみるような食物起源神話のさらなる古層への照射とみなすべきなのだろう。「ハイヌウェレ型神話(傍点筆者)」といわれる所以は、むしろここに存するといえよう。

…典型的な古栽培民の文化を持っていた、ニューギニア中央部の南海岸に近い地域の原住民マリンド・アニメ族が行っていた、マヨと呼ばれる盛大な祭りの頂点では、「マヨ娘(Majo-iwang)」と呼ばれる若い娘を生贄にする、実に凄惨な儀礼が執行された。この「マヨ」娘は、祭りに参加した男たち全員によって、性行為の対象にされた上で殺され食べられた。そして骨は、植えられたばかりのココ椰子のそばに埋められ、また血は椰子の幹に赤く塗りつけられた。

みずから紹介するさらなる食物起源神話に、吉田はコメントしている。

この儀礼は一見すると、ただ残忍きわまりない嗜虐心ともっとも低劣な性欲と食欲を満足させることだけを目的とした、無意味な蛮行のように思われよう。だがけっしてそうではないのだ。

フレーザー、J. による呪術の分類の当否についてはおくとし、ここにみられるのはいわれる所の接触呪術にたいする感染呪術に相当するものとみなしてよかろう。ヤム芋の豊穡 = 残虐な性行為による多産——この「=」すなわち「等号」とその意味するものを見失うとき、ひとはそこに「嗜虐心ともっとも低劣な性欲と食欲」しかみようとはしない。もっとも、「等号」とはいつても、たとえばデカルトにならうとして、 $2 + 3 = 5$ の「=」ではない。字義どおりの意味でのそれでないことはいうまでもない。あえて贅言を弄せば、「残虐な性行為による多産」がそのまま「ヤム芋の豊穡」であろうはずもない——自明というほかない。では、この「等号」の意味し、意義するところは何?

儀礼論の核心的術語のひとつ、substitution——「代理」、「置換」、「等置」などと翻訳されたりする。これらのことばに共通してうかがえるのは、それがけっして「同一」、「等価」、「一致」などと同義ではない、いやむしろ「背反」、「対蹠」的状況をその根源的前提にしていることである。ちなみに、substitutionという英語は、ラテン語substituereより派生し、その初見は14世紀である。constitutionやinstitutionについてもほぼ同様のことがいえる。さて、sub-とは、それ自体としては副詞で「代わりに」の意、それを接頭辞とする動詞-stituereとは、「置く、設置する」の意である。それで「代わりに置く」、すなわちうえに確認したように「代理」、「置換」、「等置」などの意味を持つようになる。

いますこし考えてみよう。sub-はもともと前置詞で、'Oxford Latin Dictionary'によれば“(Denoting the position lower than or beneath something) Under”とある。さらに語義説明の項は、“Under (something considered as a shelter, cover, means of concealment, etc.)”とつづく。してみると、sub-とは「～より下」、「あるもの下」、そしてその「あるもの」としてshelterやcoverそしてconcealmentが想定されている。いずれも覆い、隠し、遮蔽するものだ。かかるsub + situere(置く)、すなわちsubstitution(「代理」、「置換」、「等置」とは、それ自体そうあるべく「遮断」の背後に退行するのでなければならぬ。ここにいうべきは、その「等置」が可能となるのは「遮蔽」においてはじめて、いいかえれば、「遮蔽」こそがこの「等置」を可能にしているということである。

はなしをもとに戻そう。ヤム芋の豊穡 = 残虐な性行為による多産——この「=」、すなわち「等号」は自身が繋ぐ両項、それをA、Bとすれば、A、Bそのいずれをも「遮蔽」することにおいてはじめて可能となる。フレーザーの伝にしたがえば、「ヤム芋の豊穡」と「残虐な性行為による多産」は「感染」の関係にある。ただし、うえに確認されたことからすれば、この「感染」も両項の「遮蔽」をまっしてはじめて可能となることでしかない。

問われねばなるまい、「遮蔽」の背後へのこの双方の退行によって、そこではなにが…、しかし、いかなることばにせよ、それをここに嵌め込むことは問いそのものの雲散そして霧消の将来にほかなるまい。冒頭にも記した。「褻のあわい」、その火口として、「同じ」、すなわち部漣島の一キリシタン婦人のごとく、「おなじ心でございます(傍点筆者)」の意味すること、当面、そこへの論及をこととし、問い解していくことがつとめなのである。

「マヨ娘」につづく、吉田の言辭への論及は次稿に委ねることとしよう。